

私の
愉しみ
3

スター誕生の現場にて

手嶋龍一 (外交ジャーナリスト・作家) ●文

ペドロ山下 ●イラストレーション

北の大地は紫一色に染めあげられていた。眼前には古代紫のネベタが拡がり、その周りを淡い紫のヒソップが取り囲む。遙か外縁には、ほのかな藤色のラベンダー群が敷き詰められていた。北国の乾いた空気に乗って、爽やかなミントの香りがツーンと鼻をつく。ネベタはそれゆえキヤットミントともいう。

新千歳国際空港から車で二十分、広大なサラブレッドの生産牧場、ノーザンファームがあらわれる。その一角にノーザンホースパークのK'sガーデンがある。初夏の草花が咲き誇る季節には毎年、生まれたばかりの当歳馬と生後一年を経た一歳馬の競りが催される。

二〇〇九年の「セレクトセール」での出来事だった。競り会場の中央に設えられた舞台に鹿毛の一歳馬が引かれてきた。競りの名簿には「トキオリアリティーの08」とある。気品に溢れた牡馬だったが、まだ幼さを残してどこことなくひ



弱に見えたのだろう。有力なオーナーや調教師は、とりたてて関心を示さなかった。

「あの七冠馬ディーピンパクトの初年度産駒の登場です。さあ、二千五百万円から、いかがでしょう。さあ、どうぞ」

会場からまばらに手があがるだけだった。人気の若駒なら、競り値はたちまちあがっていくのだが、競りを仕切る鑑定人の呼びかけにも、会場からは声がかからない。

「母は中央で三勝、多くの優れたマイラーを世に送りだしています。さあ、三千万円、もう一声ございませんか、よろしいですか」

会場は不思議な静けさに包まれたまま、鑑定人のハンマーが振り下ろされた。主取りめしとだった。競り値が売主である牧場側の希望価格に達しないため、牧場に引き取られることをいう。

そのとき、生産牧場であるノーザンファームのオーナー、吉田勝己さんが私の席にやってきた。こんなに素晴らしい馬がなぜ主取りなんだ——サラブレッドの生産界では天才的といわれるホースマンがこれほど真剣に怒っている。それなら買いだらうととっさに声をかけた。「じゃあキャロットクラブがもらいます」

かくして庭先の直取引はたちまち成立した。キャロットクラブは、一般の競馬ファンもオーナーになれる会員制の組織で、馬産地の振興を

応援するため、数年前から私が会長を引き受けている。こうして母、トキオリアリティーの08年産駒は、キャロットクラブの所有となり、偉大な父、ディーピンパクトに因んでリアルインパクトと命名し、美浦の堀宣行厩舎に預けることになった。

翌二〇一〇年の十月に東京競馬場でデビューを果たし、二着馬に三馬身の差をつけて圧勝。

続く京王杯、さらにG1レースの朝日杯に挑戦した。結果はともにグランプリボスの二着に敗れたが、クラシック戦線を歩む先頭集団への仲間入りを果たしたのだった。その面構えには「もう誰にも主取りの馬とは言わせない」という気が漲っていた。

そしてリアルインパクトは、翌年の春のクラシック・レースを見据えて、放牧に出されたのだった。向かったのは、宮城県山元町にあるトレニングセンターだった。ここで順調に調教を積んでいたのだが、思わぬ災厄がリアルインパクトに襲いかかる。二〇一一年三月十一日、東日本大震災が山元町にも壊滅的な被害をもたらした。大津波は市街地の二千棟の住宅を全壊させて押し流し、六百人を超える犠牲者を出したのだった。

トレニングセンターは高台にあったため、津波の被害はかろうじて免れた。だが陸の孤島

と化し、従業員の水や食糧は蓄えが尽き、サラブレッドのカイバも底をついてしまう。緊急事態に際してノーザンファームの吉田勝己オーナーの決断は素早かった。地震の発生と同時に大量の援助物資を馬運車一杯に積み込ませ、北海道から日本海側を経由して山元町に向かわせた。「山元町は被害が凄まじく、当初は報道陣もあらわれませんでした。それだけにノーザンファームからの支援がどれほど役に立ったことか」食糧と入れ替わりに、リアルインパクトは、三日後に山元町から美浦のトレニングセンターに収容されたのだった。

災厄に遭った者は不思議な運が授かるという。リアルインパクトは、ダービーには挑まず、マイルの王者を決める伝統のG1レース、安田記念に三歳馬ながら駒を進めた。戸崎圭太騎手を鞍上に、レース中に蹄鉄を落としながら力走した。G1などグレード制が敷かれて以来、三歳馬として初めて栄冠を手にしたのだった。「中学生がプロの選手に勝つたような」と言われるほどの快挙だった。この勝利に誰よりも喝采を送ってくれたのは、山元町の被災者だった。東日本大震災の年にスター誕生の瞬間に立ち会い、その喜びを山元町の人々と分かちあつたことが何より嬉しい。